

研究・調査報告書

報告書番号	担当
176	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption by cirrhotic subjects: patterns of use and effects on liver function. 肝硬変患者における飲酒状況と肝機能との関連について	
執筆者	
Lucey MR, Connor JT, Boyer TD, Henderson JM, Rikkers LF; DIVERT Study Group.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Gastroenterol. 2008 Jul;103(7):1698-706. Epub 2008 May 20.	
キーワード	
肝硬変、飲酒、肝機能	
要旨	
<p>目的： 肝硬変患者における飲酒様式と肝機能との関連について検討する</p> <p>方法： アルコール性肝障害の合併する 78 例を含む肝硬変患者 132 例を対象に 2 カ月から 93 カ月にわたり(中央値 49 ヶ月)追跡した。飲酒状況は家族の協力のもと質問票により一日当たりの飲酒量を 6 カ月ごとに聴取した。Cox 比例ハザードモデルを用いて死亡、脳症、静脈瘤出血のオッズ比(OR)を算出した。</p> <p>結果： 21%に当たる 28 例 が調査開始時でも飲酒していた。また、追跡期間中 45%にあたる 60 例が飲酒した。一日 4 杯以上の多量飲酒はアルコール性肝障害の 25 例に認められ、アルコール性肝障害でない患者と比較して統計的に有意に多く認めた。アルコール性肝障害では飲酒者は <math>\gamma</math> GGT が 153%増加していた。アルコール性肝障害患者では死亡(46% vs 30%)や腹水(33% vs 20%)、脳症(56% vs 42%)、静脈瘤出血(11% vs 3%)を高頻度に認めた。Cox 比例ハザードモデルによる検討では多量飲酒の既往が死亡との関連を認めた(OR=2.59,95%CI 1.26-5.34)。現在の多量飲酒は静脈瘤出血のリスク上昇と関連を認めた(OR=10.85,95%CI 1.86-61.1)。</p> <p>結論： アルコール性か否かにかかわらず肝硬変患者の多くは 5 年間の観察期間に飲酒を認めなかった。多量飲酒はもっぱらアルコール性肝障害の患者に認められた。アルコール性肝障害の患者において飲酒は GGT の増加と関連を認め、死亡やシャント障害からの出血との関連を認めた。</p>	